造之者多、

〔鶉衣 續編下〕名茶杓辭

茶杓に名を付て得させよといふ人あり、其いふ人はわが此道によらざるをしりていふなれば、おもしろくおぼえて、雪の夜と書て贈る、君しるや雪はしろく夜は寒し、

茶にたはむ竹や雪より猶寒し

〔四方のあか 下〕茶杓記 石原氏に代りて作れり

いにし寛延己巳年○二の秋、近江の國三井寺の櫻の根をわかちて庭に植置しに、志賀のうら浪たちかへり、としゝ春のながめ絶せず、ことし聊その下枝をきりて、茶杓となし、人のもとに贈るとて、そのよし箱の蓋にかきつく、猶一爐の清風を添て、百花の餘香に飽んとなり、

〔人倫訓蒙圖彙 五〕茶杓師　所々に住す、是をあきなふ家、茶ひさく竹輪自在等これあり、堺の甫竹名人也、利久のながれといふ、寺町一齋、

〔毛吹草 三〕和泉　茶酌

〔雍州府志 七 土產〕茶杓　揉竹片掬抹茶、是謂茶杓、利休之所造、專爲珍、常盛茶杓於竹筒而藏之、其筒亦作茶杓、人之所設也、或筒上記茶杓號、又有作者名者、間有之、故無筒則不爲眞、

〔茶道望月集 十 四〕此時○利休ノ時より其茶杓入を比能竹にて作りて茶杓筒と云、夫に杉か檜にて其口を詰て用、夫より其竹の摸樣、又竹の出所などに思ひよりて作銘をなし、又作者の名印を其筒に記す事也、

〔茶傳集 十 一〕茶杓花入の事

一茶杓の筒は、樋深き茶杓には、樋なしに本末同太サに削ル、樋ノ淺キ平樋茶杓には、竹ノ目を殘、中ぶくらにけづる、二色計也、削樣習なし、如何にも疎早にソコノメンナドもあらく太く切テ置